

中観派における過類 (*jāti*)

小 野 基

0. 序

『方便心論』(**Upāyahrdaya* =UH) で正当な論難とされた「相応」が *Nyāyasūtra* (=NSū) の過類説の成立を促し、また竜樹 (Nāgārjuna; ca. 150–250) 著作を始めとする初期中観論書で用いられる各種の帰謬論法と類似していることは、梶山博士の論証により明らかである (梶山 1984: 32–39)。それゆえ、後に世親 (Vasubandhu; 4–5 世紀頃) や陳那 (Dignāga; ca. 480–540) らの仏教論理学がニヤーヤ学説を受容して「相応」に類する論法を過類 = 誤難として批判的に位置づけた際、竜樹の後継者である中観派の諸論師がこの過類をどう取り扱ったのかは、インド仏教思想史上の興味深い問題と言えよう。本稿では清弁 (Bhāviveka; ca. 490–570) と月称 (Candrakīrti; ca. 600–650) の諸論書における過類とその関連概念への言及を検討し、この問題の解明に資することとしたい。

1. 陳那以前

陳那以前の中観文献には過類 (*jāti*, *ltaḡ chod*) という語の用例は僅かしかない。*Vaidalyaparakaraṇa* (=VP) には NSū の第 15 句義である *jāti* に関して原語 *jāti* が持つ「生起」という語義を問題にして「生起 (*jāti*) は既に生じたものでも未だ生じないものでも現に生じつつあるものでもない」という初期中観に典型的なトリレンマを構成して *jāti* の範疇を否定する用例があるが (VP 109a6–b1)、この論難自体が実は過類に類する帰謬論法であることは注意されてよいだろう。他方、仏護 (Buddhapālita; ca. 370–450) の *Mūlamadhyamakavṛtti* (=MMV) 第 7 章には竜樹の議論を過類と呼んで非難する対論者が登場する。この対論者に対し仏護は「過類はそれ自体が目的ではなく真実を知らしめるためである」と回答している (MMV 187b6–188a2)。即ち彼は過類を正当な論難として擁護する訳ではないがその意義は認めていて、「竜樹の議論は過類でない」という答え方はしていない。

2. 陳那以降——中期中観派と過類——

所謂 Spitzer 写本の弁証論の内容から見て、後の世親や陳那に連なる仏教論理学の初期の潮流では恐らく3世紀末の段階で既にUHの「相応」のような帰謬論法を誤難と位置づけるNSūの過類説がかなりの程度受容されていたと考えられる (Franco 2004: 498; Ono forthcoming). この方向性は更に進展し、『如実論反質難品』(**Tarkaśāstra* =TS) ではNSūの24過類が独自の観点から3種に分類され16に纏め直された。だが他方でSpitzer写本の弁証論とTSでは或る種の帰謬論法を正当な論難とする見解が並存していたことも見逃せない (梶山1984: 95; Ono forthcoming). 上記の仏護の態度はこうした同時代の仏教論理学の状況を反映している可能性もある。しかしながら世親の *Vādaśāstra* に至り過類は14にまで整理されると共に過類的論難への肯定的評価は仏教論理学の中では姿を消すことになった。続く陳那では過類は明確に誤難 (*dūṣaṇābhāsa*), 即ち「論理的誤謬 (*sādhanābhāsa*) を誤って指摘すること」と定義されて正難 (*dūṣaṇa*) の対立概念として論理学体系の中に位置づけられ (小野2017a: 46–50), その結果『因明正理門論』(*Nyāyamukha* =NMu) では従来の曖昧な3分類から脱却して、過類をそれらが誤って指摘している論理的誤謬の観点から規定し (似不定 *anaikāntikābhāsa* 等), 体系的に分類することが可能になった (小野2017b: 455). では、陳那による過類説の確立を経て、過類に関する中観派の論師達の見解はどうなっていったのだろうか。

2.1. 清弁

清弁の諸著作の中、『大乘掌珍論』(**Hastaratna* =HR) には仏教論理学の14過類に含まれる分別相似・義准相似への言及があり、また陳那に倣って過類を「似不成(過)」等と呼んで論理的誤謬の観点から規定する用例が多数見られる。

HR冒頭に示される空性論証の2つの推論式の第1は「眞性有爲空如幻縁生故」(HR 268b21) であり、同書巻上の記述はこの推論式の正当性をめぐる議論の応酬からなるが、その中の或る問答で対論者は「幻土」は喩例として適当でないとして清弁の推論式を批判し、さらに問答の後半では「幻土は実在の人間と区別され得るから空だが眼等の有爲法はそうでないから空ではない」と論難する。これに対し清弁は、この論難は分別相似 (*vikalpasama*) であるとする (HR 271a27–b19). この文脈では対論者は喩例と主題の間に対立する属性を想定することによって論難しているが、この論法は分別相似に他ならない (PSV ad PS 6.12ab; cf. de la Vallée Poussin 1933: 90, note 2; 北川1965: 316–321). 即ち、ここでは清弁は仏教論理学の過類

説を援用して、自身の推論式に対する論難の誤りを指摘している。

同様に、HR 巻下では冒頭偈後半部の第2の推論式「無爲無有實不起似空華」(HR 268b22)をめぐって議論が展開されるが、その中で或る対論者が清弁の推論式に含意される喩体の命題から「およそ生起したものは実在である(起者皆實)」という命題を導き、その不遍充を論難する。これに対し清弁は、この論難は義准相似(*arthāpattisama*)であると回答する。すなわち、対論者は単なる換質によって命題を導く誤りを犯している、と指摘するのである(HR 274a3-9)。彼はここでも仏教論理学の過類説(cf. PSV ad PS 6.19ab; 北川1965: 342-345)を援用して自身の推論式に対する論難を斥けている。なお陳那が義准相似の論理的誤謬を似不定(*anaikāntikābhāsa*)としたのに対し(PS 6. 19cd)、清弁がこれを似不成としているのは聊か奇異である。

HRで「過類」という語が言及されるのは以上2箇所のみであるが、別の3箇所に「似不成」等の表現のみを用いて対論者の論難の誤りを指摘する文脈があるのが目を引く(HR 269b13-17; 269c15-17; 270c27-271a9)。これらの箇所では清弁は、14過類を論理的に説明した陳那の方法を踏襲して、特定の過類に必ずしも同定できない誤った論難を論理的に説明して斥けるために、「似不成」等の表現を用いていると見られる。これは清弁の新機軸と言えよう。

他方、*Prajñāpradīpa* (=PP)の蔵訳には *ltag chod* の語が5箇所に登場し、「分別相似」の名称が二度言及される他、HRにおける「似不成」に対応する *ma grub par ltar snang ba* 等の表現も数箇所に現れる。

清弁は『中論』(*Mūlamadhyamakakārikā* =MMK)第1章冒頭の四不生偈の中の「他不生」を論証するために「勝義には諸感官はそれらの縁である他のものより生じない。他であるから、瓶のように。」という推論式を立論する(PP 49b4)。これに対して対論者は、論証因である「他性」に関して、喩例の他性と主題の他性とは意味内容が異なるとし、他性が瓶のそれであれば主題には存せず諸感官のそれであれば喩例に存しない、と論難する。これに対して清弁は、そもそも論証因は一般的な属性だからこの論難には二つの論理的誤謬がある、とする。一つは論証因の不成立を誤って指摘する似不成(*asiddhābhāsa*)であり、二つには喩例の能立法不成を誤って指摘する似喩過(*dr̥ṣṭāntadoṣābhāsa*)である(PP 50a3-4)。ここでは過類の名称は明言されないが、陳那がこの2つの誤謬を帰せしめる過類は所作相似(*kāryasama*)である(NMu 5b27-c2; cf. 桂1987: 55-58; 能仁1992: 註38)。更に同じ第1章におけるサーンキヤ説批判の推論式をめぐる議論の中にも過類への言及があるが

(PP 52b4-6), その論難の構造は前述の議論と全同であり, これも所作相似の指摘と見てよい(能仁1996: 註46).

次に, MMK 1.8ab を清弁は「現に生じている(識)にも所縁はない. 現に生じているものだから, 色のように.」という推論式に構成したが(PP 59a5-59b1), この推論式に対する或る論難を分別相似と呼び, その誤りを指摘する(PP 59b4-7; cf. Kajiyama 1964: 118-119; 能仁2006: 23). だが仏教論理学による分別相似の説明では「似不定」が論難の誤りの理由とされたのに対し, ここでの清弁の説明はやや異質で難解である. PP では第17章にも分別相似への言及が存するが(PP 175b3-5; cf. 梶山1979: 334), そこでは清弁は自らの推論式への論難ではなく, 経量部の立論に対する正量部の論難を分別相似と呼んで斥けている.

他方, PP 第2章に現れる過類の語の用例は従前の HR や PP の諸用例とは異なり, 対論者等の論難を誤りとして斥ける文脈ではない. この箇所では, 対論者が竜樹を論難して「MMK 2.18-20における「去る者と去ることは同一でも別異でもない」という言明は「去ることは存在しない」という従前の主張を破棄した敗北状態 (*nigrahasthāna*) あるいは一種の過類である」と主張するのに対し, 清弁は, これは主張の破棄でも過類でもない, と応じて竜樹を擁護する(PP 72b3-5; cf. 立川1985: 51-53). 複註によると対論者は, 「去る者」と「去ること」の間に同一と別異を想定するのは「語は無常である. 勤勇無間所発のゆえに.」という推論式に対して「(無常の主体である) 語と無常は同一か別異である」と想定して論難するのと同様の過類である, と主張するのである(PP [Wa] 271b4-7). 仏教論理学の14過類中にはこの論難に相当するものはなく, むしろUHの「相応」を彷彿させる素朴な論難であるが, いずれにせよ対論者が竜樹の言説を過類と見做すのに対し, 清弁がこれを明確に否定している点が注意されるべきである.

さらに, HR における漢訳の「似…」という表現と同様に, PP にも蔵訳の...*ltar snang ba* という表現が *ltag chod* という語を伴わない用例が相当数見出される. MMK 第5章への註の中で清弁は界 (*dhātu*) の実在を説く対論者説を「勝義には地等の界は必ず存在する. それらの相が存在するから. およそ世尊が勝義に存在しないと言われたものには相が存在しない. 例えば空華のように.」という推論式に構成し(PP 89b2-4; cf. Ames 1999: 74), 竜樹による同章第1偈「虚空は虚空の相より以前には決して存在しない. もし相より以前に存在するなら, それは相をもたないものになってしまう.」をこの推論式への論難と位置づける. そして対論者が竜樹の論難は論証因の不成立を誤って指摘している (*ma grub pa ltar snang ba*,

asiddhābhāsa), 即ち過類であると反論するのに対し, 清弁は竜樹の論難を正当とする (PP 91b6-92a4; cf. Ames 1999: 82-83). 清弁の立論した推論式に準じて考える限り, 竜樹の論法は推論式における論証対象と論証因の時差を問題にしており, UH の「時因/同」や仏教論理学の無因相似の論法に類似することは否めないが, 清弁はこれを論証因の不成立を正しく指摘した正難と認めているのである.

以上のように, HR と PP には清弁が自身の推論式に向けられた論難を過類として斥ける文脈が数多く見られる. 清弁は陳那の確立した過類説を受容し, それを自著作中で援用しているのである. 具体的な過類として分別相似・義准相似・所作相似が言及されている. 彼はまた陳那が過類を分類し論理的に説明する際に用いた...*ābhāsa* という表現を用いて, 14 過類として定義された特定の誤難に限らない誤難一般を論理的誤謬の誤った指摘として説明することも行った. 仏教論理学の潮流では陳那による過類説の確立以降過類説が殆ど言及されなくなったのとは対照的に, 清弁による用例は多く, 陳那説からの逸脱も若干垣間見えるが, 彼が陳那の過類説を最も多く援用した論師の一人であることは疑いを入れない.

だが他方で, 清弁は PP の中で2度, 竜樹の用いる帰謬論法を過類とする見解を否定している. 彼は仏護とは異なり, 竜樹の論法が過類と呼ばれることを峻拒する. 陳那の過類説を受容した清弁にとっては過類とは誤難に他ならず, 竜樹が誤難を行うことはあり得ない. だが, これは清弁が結果的に MMK に見られる或る種の帰謬論法を正当な論難として承認していることを意味しよう.

2.2. 月称

それでは月称の場合はどうか. まず *Prasannapadā* (=PrP) では *sādhyasama* という術語が問題になる. 御牧博士は MMK, *Vigrahavyāvartanī*, VP, PrP におけるその用例を検討し, 三種ある用例中の一つが NSū の説く *jāti* の一種としての *sādhyasama* に相当すること, 但しその価値づけは NSū と中観派では逆で, 前者で誤難とされている *sādhyasama* の論法が後者では正難として扱われていることを指摘した (御牧1984: 576). PrP ではこの論法は10か所程度で言及されるが, 月称がこの論法を多用していることは注目に値する. と言うのも陳那の14過類には *sādhyasama* という名称こそ含まれないが, 内容的に *sādhyasama* に相当する論法が *prasaṅgasama* (生過相似) の名の下に14過類の1つとされているからである (PSV ad PS 6.20ab; cf. 北川1965: 346-347; 桂1987: 61). つまり月称は陳那が過類と位置づけた論法を PrP で積極的に用いているのだ. 他方で PrP には過類を意味する

jāti という語も論難の誤りを説明する...*ābhāsa* という表現も全く現れない。これは同じ MMK の註釈である清弁の PP と比べて特徴的である。

一方 *Catuḥśatakaṭīkā* (=CŚT) では第5章第23偈への註釈で *jāti* が言及されている。そこではミーマーンサー学派が「如来は一切智ではない。人間だから。他の人間のように。」という推論式を立論するの対し、月称はその論駁のためにUHの「相応」とも類似した論難を自ら展開する。そして、こうした論難が過類であるという指摘を想定した上で、原立論に対する反立論の主張がないことを理由に、自身の論難が過類であることを否定している (CŚT 104a5-b5; cf. 上田1994: 84)。

最後に、*Madhyamakāvātāra* (=MA) 第6章では第169-178偈に因果関係の否定の問題を契機として論難 (*dūṣana*) と論難対象 (*dūṣya*) の関係の問題が論じられるが (小川1976: 312-324; Tauscher 1981: 53-65)、この議論は仏教論理学の14過類中の至非至相似・無因相似と密接に関連する。

ここでは月称は、「もしも君にとって原因は(結果に)到達した上で結果を生ぜしめるならば、その場合には生ぜしめるもの(=原因)と結果の区別が存在しないことになる。その両者には同じ能力があるから、また(結果と)別であるならば、この原因は原因でないものと区別されなくなる。そして、この二つ以外の選択肢は存在しない。」(MA 6.169)と述べて因果関係一般を否定する。月称が用いるのはUH第4章の「不到」「到」にまで遡ることのできる古い帰謬論法である。この論法における「原因と結果」を推論における論証因 (*sādhana*) と論証対象 (*sādhya*) の関係に適用した論難がNSūによって *jāti* とされ (*prāptisama* と *aprāptisama*)、その論法の正邪をめぐる論争が初期中観文献に記録されているが (梶山1984: 37-38)、やがてこの論法はTŚを経て世親と陳那によって至非至相似 (*prāptyaprāptisama*) として14過類中に位置づけられた (PSV ad PS 6.3; cf. 北川1965: 284-290)。しかし月称はMA第6章で敢えてこの論法を復活させて、実体的存在間の因果関係一般を否定する論を展開するのである。

この論難に対してはNSūにまで溯る伝統的な反論がある (NSū 5.1.20)。月称はMA第171-172偈でこの反論を「だが、論難は論難対象に到達した上で論難するにせよ、それに到達せずに(論難する)にせよ(成り立たない)、という誤謬が(論難する)君にもあるのではないか。上述のように語ることによって君が自分自身の主張を破壊する場合には、君は決して論難することはできない。(君)自身の言説にも等しく帰結する過類的論難 (*jātyuttara*) によって君は全ての事物を無闇に否定するから、それゆえ君は正しい人によって承認されず、また君には自身の

主張というものが存在しないのだから、君は揚げ足取りの輩である」(MA 6.171-172)と紹介する。第169偈で月称が提示した論難に対し、対論者は、論難と論難対象を原因と結果と見做すならば月称の言説内容は月称の論難そのものにも跳ね返る、すなわち「論難は論難対象に到達した上で論難するにせよ、それに到達せずに論難するにせよ、成り立たない」と反論するのである。

実は、この2偈の中の「自分自身の主張を君は破壊する」(*svaṃ pakṣam eva vinihaṃsi*)という対論者の指摘は、陳那が至非至相似・無因相似の論法への批判の中で用いた「自己を否定する誤謬」(*svaghātivadoṣa*)という表現に対応している(NMu 5a23; PSV ad PS 6.3)。また「等しく帰結する」(*samaprasaṅga*)という表現も陳那がPSV ad PS 6.20dと恐らくはNMuでも用いた重要な術語であり、さらに「君は全ての事物を無闇に否定するから」(*nyāyaṃ vināpavadase sakalān padārthān yasmāt*)という文言も陳那の「非理誹撥一切因故」(*anyāyena sarvahetvapavādāt*)という表現(NMu 5a19-20; PSV ad PS 6.3)によく対応する(cf. 桂1987: 48-49)。第171-172偈で月称が陳那による至非至相似・無因相似批判の具体的な記述を念頭に置いていることは明白であろう。第173偈以降で月称はこれに反論を加えるのだが、これは事実上陳那の過類説への批判である。即ち、月称はPrPでは陳那の過類説をほぼ無視する一方、MAでは部分的にせよ、これを積極的に取り上げて論駁しているのだ。

以上、月称の過類への言及をPrP, CŚT, MAに関し概観した。清弁とは対照的に月称は陳那の過類、中でも生過相似と至非至相似に類する論法を誤難とは認めず、むしろそれらを正難と位置づけて自ら積極的に用いている。過類に対するこうした取り扱いは竜樹の立場に忠実であろうとする限り当然の帰結であろう。

3. 結語

中期中観派の中には陳那の過類説に対する全く異なる二つの立場があった。清弁がそれを採用して自説を論じたのに対し、月称はそれを認めなかった。この両者の立場の違いが中観派内の自立論証派・帰謬論証派における陳那論理学への評価の違いに対応していることは言を俟たない。但し、清弁は全ての過類的論難を画一的に誤った論難とみなしたわけではなかった。一方の月称も、特定の過類を竜樹由来の論法として他の過類から峻別して、その正当性を担保した可能性もある。中期中観派に垣間見えるこうした過類の両義的取り扱い、むしろ陳那以前のTŚのそれと近似的であるとも言えよう。

〈一次文献〉 **HR:** 『大乘掌珍論』 T1578. **NMu:** 『因明正理門論』 T1628. **CŚT:** *Catuhśatakaṭīkā:* D3865, Ya 30b6–239a7. **MA:** *Madhyamakāvatāra:* s. Li 2015. **PP:** *Prajñāpradīpa:* D3853, Tsha 45b4–259b3. **PPT:** *Prajñāpradīpaṭīkā:* D3859, Wa 1b1–287a7. **PSV:** *Pramāṇasamuccayavṛtti* D4204, Ce14b1–85b7; P5702, Ce93b4–177a7. **MMV:** *Mūlamadhyamakavṛtti:* D3842, Tsa 158b1–281a4. **VP:** *Vaidalyaprakaraṇa:* D3830, Tsa 99b1–110a4.

〈二次文献〉 **Aimes, William L. 1999.** “Bhāvaviveka’s *Prajñāpradīpa:* A Translation of Chapters Three, Four, and Five, Examining the *āyatanas*, Aggregates, and Elements.” *Buddhist Literature* 1: 1–119. **Franco, Eli. 2004.** *The Spitzer Manuscript. The Oldest Philosophical Manuscript in Sanskrit* II. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. **Kajiyama, Yūichi. 1964.** “Bhāvaviveka’s *Prajñāpradīpaḥ* (1. Kapitel) (Fortsetzung).” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens und Archiv für Indische Philosophie* 8: 100–130. **梶山雄一 1979** 「パーヴァヴィヴェーカの業思想——『般若灯論』第十七章の和訳——」雲井昭善編『業思想研究』平楽寺書店, 305–357. **梶山雄一 1984** 「仏教知識論の形成」『講座・大乘仏教9 認識論と論理学』春秋社, 1–101. **桂紹隆 1987** 「因明正理門論研究 [七]」『広島大学文学部紀要』46: 46–67. **北川秀則 1965** 『インド古典論理学の研究』鈴木学術財団. **Li, Xuezh. 2015.** “*Madhyamakāvatāra-kārikā* Chapter 6.” *Journal of Indian Philosophy* 43: 1–30. **御牧克己 1984** 「インド・チベット論理学に於ける「所証相似」(sādhyasama)の問題」『哲学研究』47(8): 567–592. **能仁正顕 1992** 「『知恵のともしび』第1章の和訳(1)——縁の考察」『仏教と福祉の研究』永田文昌堂, 45–66. **能仁正顕 1996** 「『知恵のともしび』第1章の和訳(2)——縁の考察」『仏教学研究』52: 85–103. **能仁正顕 2006** 「『知恵のともしび』第1章の和訳(4)——縁の考察」『仏教学研究』61/62: 15–43. **小川一乘 1976** 『空性思想の研究』文栄堂. **小野基 2017a** 「Vādaividhiの誤難論とディゲナーガの批判」『インド論理学研究』10: 43–92. **小野基 2017b** 「『因明正理門論』過類段偈頌の原文推定とその問題点」『印仏研』66(1): 450–456. **Ono, Motoi. forthcoming.** “A Reconsideration of Pre-Dignāga Buddhist Texts on Logic.” de la Vallée Poussin, Louis. 1933. “*Madhyamaka, III. Le Joyau dans la main.*” *Mélanges chinois et bouddhiques* 2: 1–146. **立川武蔵 1985** 「清弁著『知恵のともしび』第II章和訳・解説(IV-2)」*Śaṃbhāṣā* 6: 44–55. **Tauscher, Helmut, trans. 1981.** *Madhyamakāvatārah und Madhyamakāvatārabhāṣyam: Kapitel VI, Vers 166–226, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde* 5. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien. **上田昇 1994** 『月称著『四百論注』第一～八章和訳』山喜房仏書林.

(平成30年度科学研究費基盤研究(B)18H00609による研究成果の一部)

〈キーワード〉 *jāti*, Dignāga, Bhāviveka, Candrakīrti

(筑波大学教授, Dr. phil.)